

中学校

学年を越えたチームで効果的な支援を考えよう

- 1. 目的** 特別な支援を要する生徒に係る1学期のアセスメントを基に、対象生徒に関わる学年を越えた教職員がチームとなって、2学期の支援策について検討、共有する。
※対象生徒への支援について、PDCAサイクルを、短期（普段）－中期（学期毎）－長期（1年）とつなげることを意識しましょう。
※外部講師による講義や助言を組み込むと、さらに効果的です。例えば、県総合学校教育センターの校内研修等講師派遣事業を活用することができます。
- 2. 対象** 教職員（※夏季休業中の実施を想定した研修モデルです。）
- 3. 時間** 90分（事前5分、講義20分、演習・協議40分、共有10分、助言10分、省察・振り返り5分）
※校内外の講師による講義及び助言を省略して、60分で実施することも可能です。
- 4. 形態** 全体（校内外の講師による講義）
→グループ（対象生徒への支援についてKPT法を使って検討、協議、発表）
→全体（助言）
→個人（振り返り）

※グループの分け方
学級担任を含め、対象生徒に関わる学年を越えた教科担任や部活動関係教員等の4人程度のグループを学校の実態に応じて編成
- 5. 準備物**
 - 対象生徒の実態や指導・支援に関する資料（1学期に行った支援やその結果等）
 - 支援ヒント集
 - 協議用ホワイトボード（各グループに1枚）
 - ホワイトボードマーカー
 - 付箋（青・ピンク・黄色をそれぞれ10枚×人数分）
 - 黒サインペン（人数分）
 - KPTシートまたは模造紙（グループ数分）
※KPTシートはダウンロードできます。
 - KPTシートを貼るためのマグネット（グループ数×4）

■研修前

- 研修会の概要等について、予め会議や紙面等で伝達する。
- 準備物、支援を検討する対象生徒及びグループ構成等を決定し、事前に通知する。
- 支援ヒント集を各自印刷したり、タブレットPC等にダウンロードしたりして、当日閲覧できるようにしておく。
- 研修に当たって、対象生徒の実態や指導・支援に関する資料の内容を確認しておく。

■研修当日

| 流れ | 進め方 | 留意点等 |
|---|---|--|
| 1 研修の説明【全体】 対象生徒について考える【個人】 (5分) | ○目的、流れなどを確認し、見通しを持つ。 ○対象生徒との関わり方を振り返り、うまくいった支援(青)やうまくいかなかった支援(ピンク)を付箋に記入する。 | ○付箋を用意する。 ○青は「～する」という文章で書く。ピンクは解釈を入れずに、事実のみを記入する。 ○付箋に記入することで、課題意識を高めるようにする。 |
| 2 講義【全体】 (20分) | ○講義を聞く。 (テーマ例：特別な配慮を必要とする生徒への支援) | ○講義内容から、生徒の実態の捉え方や支援方法をイメージする。 ※管理職等に講師を依頼する場合、「スライド②『講義用』」を活用することもできます。 |
| 3 演習・協議【グループ】 ①講義を踏まえて個人で思考、付箋記入(K、Pについて)(5分) ②付箋貼付、整理・分類(15分) ③個人の思考、付箋記入(Tについて)(5分) ④付箋貼付、整理・分類(15分) | ○個人の思考を付箋に書き出す。 ○KPTシートに次の支援ごとに分けて付箋を貼りながら説明する。1学期の生徒の実態を踏まえること。 K・・・うまくいった支援 P・・・うまくいかなかった支援 T・・・学級担任や教科担任等で試したい支援策や解決策 ○生徒の実態の捉え方や支援に対する考えを共有する。 | ○「流れ1」で記入した付箋も活用する。付箋の内容を簡潔に説明しながら、該当箇所に付箋を貼る。 ○内容が似ている付箋は重ねたり分類したりして、タイトルをつける。 ○Tについては具体的な支援策や解決策を説明する。 ○対象生徒の実態に応じて支援ヒント集を活用する。 ○K、Pに貼付の付箋と関連するTに貼付の付箋を線で結ぶ。 |
| 4 共有【全体】 ①ポスター発表(5分) ②まとめ(5分) | ○グループの発表者が、KPTシートを使いながら協議内容について発表する。発表者以外の方は他グループの発表を聞きに行く。 ○発表者以外の方は、自分のグループに戻り、他グループの発表内容を報告して共有する。 | ○Tの支援策や解決策を中心に発表する。 ○他グループの発表を踏まえ、支援の見直しや新たな支援を検討する。 |
| 5 助言【全体】 (10分) | ○講師からの助言を聞く。 | ○助言内容から支援策の留意点を押さえ、具体をイメージする。 |
| 6 省察・振り返り【個人】 (5分) | ○それぞれの立場で、実践する支援の優先順位を決定し、各グループの中で共有する。 | ○学級担任、教科担任、部活動関係教員等で、予想される効果と着手しやすさから実践する支援策を決定する。 |

■研修後

- 助言や個人での省察・振り返りを踏まえ、学級担任、教科担任、部活動関係教員等のそれぞれの立場で支援を実践する。
- 効果的なTは、次のKとなる。そこから、新しいTを導く。これを繰り返すことで、毎回Tの評価が行われ、効果的にPDCAサイクルを回すことにつながる。